

特別展「松江城大解剖－城郭そして城下町－」記念講演会にかえて

コラム（２）

－近世大名の儀礼行為－

武家儀礼と陶磁器

江戸において行われた最も格式の高い儀礼は、将軍の御成であろう。こうした時代の象徴的な儀礼をみることによって、典礼の内容やそこで使われた道具について知ることができる。一例を挙げてみよう。元和 3(1617)年 5 月 13 日に徳川秀忠が行った前田家への御成の次第は以下の通りであった。

- ①露地より数寄屋へ入り、茶事、膳、
- ②御成書院にて式三献、
- ③大広間にて賜物、献物、能、
- ④御成書院にて饗宴、賜物、献物、
- ⑤広間にて能楽鑑賞、
- ⑥露地より帰る

秀忠の後期から家光の前期の御成は、「数寄の御成」と言われる茶事が重要視されていた時代のものであったが、基本的な内容に変化はない。御成のメインイベントは、式三献と言われた君臣の固めの杯である。これは神前で誓う行為であり、こうした場で使う道具は、白木の膳とかわらけである。また、陶磁器を使う場としては、茶を喫しながら様々なことについて話しをする茶事と将軍、御相伴衆などとともに共食する饗宴である。これらから武家儀礼で使用

する陶磁器は、かわらけ、茶器、饗宴道具の三種類である。このうち磁器利用を考えた際には、茶陶の一部（青磁、祥瑞、古染付、呉須手など）には存在するものの多くの量は必要ない。揃いの食膳具は饗宴で利用されるものである。



【写真 3】元和御成で出された本膳料理の図
（『十六式図譜』〔明治 36 年刊〕より）

出土した江戸の儀礼道具

格式の高い儀礼では本膳料理（儀礼膳）は白木の膳とかわらけが使用される。ここでは杯事が行われ、その後に引替膳として出される料理が、磁器や漆器に盛られた宴会料理になる。

江戸の発掘調査では、文京区東京大学構内遺跡（加賀藩）、新宿区尾張藩上屋敷後遺跡（尾張藩邸）、港区汐留遺跡（仙台藩邸）、千代田区有楽町一丁目遺跡（藤井松平藩



【写真 4】加賀藩御殿空間から出土した
多量のかわらけと動物遺存体

邸)、同区神田淡路町二丁目遺跡(淀藩邸)などの大名屋敷から多量の陶磁器が、火災による一括廃棄された状況で出土しているが、これら資料群は次のような共通の特徴を有している。

- ・大皿を含む磁器鉢、皿、坏類などの食膳具が多く、偏った胎質・器種組成を示している
- ・上質な磁器製品がその主体を占めている
- ・大型製品を除く皿、鉢、坏類は、揃いで出土している
- ・皿類の大きさは、鉢、大皿、中皿、小皿と大きいものから小さいものまでの規格が確認できる

一例を紹介しよう。加賀藩本郷邸は、現在、東京大学がある場所に存在したが、天和 2(1682)年の八百屋お七の火災によって屋敷が全焼する。この火災に伴って、加賀藩邸と加賀藩の分家である大聖寺藩邸から上質磁器の一括資料が出土した。被災の年代が、延宝 6(1678)年の松江の母衣町大火に近く、展示資料と比較できる例と言える。

大聖寺藩邸から出土した地下室 L32-1 からは、焼土とともに約 5 万点の陶磁器が出土し、その 9 割が磁器であった。磁器は、中国浙江省龍泉窯の青磁(14~15 世紀)、江西省景德鎮窯や福建省漳州窯の青花や色絵(17 世紀前半)、肥前の染付や色絵(17 世紀中~後葉)などで構成されていた。器種は、揃いの鉢、皿、猪口などの食膳具で構成されている点が大きな特徴であった。磁器の質も高く、中国製のいわゆる祥瑞、古染付、芙蓉手、呉須手、呉須赤絵などと、肥前の有田南川原、楠木谷窯、長吉谷窯などの当時の最も精緻な製品で構成されていた。これと加賀藩邸から確認された焼土層出土資料からは、古九谷様式丸文色絵型皿【写真 6】、柿右衛門様式染付鳳凰文皿【写真 7】など松江城下町遺跡との共通性が高い製品が確認されている。



【写真 5】元禄火災廃棄の上質磁器揃い品
(東京大学構内遺跡出土)



【写真 6】古九谷様式丸文色絵型皿
(東京大学構内遺跡出土)



【写真 7】柿右衛門様式染付鳳凰文皿
(東京大学構内遺跡出土)

堀内 秀樹 (東京大学埋蔵文化財調査室 准教授)